常陸紀行

中

ル 4
333
2上

門 儿呂 端 333 巻 2

常五

常陸紀行　坤

洗心山人　黒崎貞孝至純　文撰

常陸國日本書紀に土地とつゝき道路を通じ[illegible]
[illegible]後大鐵冠鎌足の孫淡海公不比等の三男藤原
宇合（宇合又馬養）常陸守に任せられ此土におさえ[illegible]
[illegible]是すりさき元正天皇靈龜二年遣唐使に選ら
まれ宇合を副使に拳ら[illegible]道に住うもとい[illegible]宇合
當時其才德名聲藉甚なるを推して初め[illegible]
懷風藻に贈僑判官留在京の序に侍あり今

世ノ録セリ

倅典明公、忘言歳久、義存伐木、道叶採葵、待天千
里之駑、于今三年、懸我一筒榻、於是九秋、如何授官
尚日、乍別殊郷、為判官、公潔等水壺、明逾水鏡、学
隆万巻、智載五車、留驥足於将展、預孫枝於迴息、曷
之擬、恥忝簡金科、何異宣尼返魯、刪定詩書、叔孫
入漢、制設礼儀、夫天子下詔、色列置師、咸審才周、
各得其所、明公獨自遺闕、出挙、理合先進、還是後夫、璧
如吳馬、痩盬人尚、無識楚臣、泣玉、獨不悟、然而歳寒

後驗、松竹之負風、生延解、芝蘭之馥、非鄭子産、孰共
然明、非齊桓公、何擧寧戚、知人難、逝今日耳、過時之
罕、自昔然矣、大器之晩、終作寶質、如有我一清之言、
庶幾慰君三思之意、今贈一篇之詩、輙示寸心之歎、其
詞曰

自我弱冠、從王事、風塵歳月、不曾休、塞雁、唯獨坐、邉
亭、少、懸榻、長、懸、揺落、秋、琴、瑟之交、遠、相阻、芝蘭之
契、掬、無由、何見李將鄭、有別何、遥遠、典猷、馳心、悵
望白雲、天寄語、徘徊明月前、日下皇都、君抱玉、雲

端、邉國我詞、絃清絃入化、經三歳、美玉鞘、光幾度、
年、知己難逢、亟合耳、忘言罕遇、從来然為期、不怕
風霜觸、猶似巖心松柏堅
後長老三年五月叙正五位上七月朝廷始て置按察使馬
養をして上総下総安房三國を管せしむ常陸守の故、
聖武天皇神龜、初為持節大將軍、副將軍高橋安
麻呂と国〻に海東諸夷を征し、従三位を授ら北
三年八月擢ら北て為参議、是歳を以て豊幾内
按察諸道鎮撫使、一品新田部親王を大総管と
宇合をして副総管とし、むに明年西海道節度使と
なり、六年三月授正三位、云〻
石上乙麻呂八左大臣贈従一位麻呂第三子也其為人頴秀
雅容閑雅、甚善風儀、墓志墳典兼愛篇翰、神龜年
中朝廷詔して唐使と簡ばれ遣はす大使小拜、
衆意悦服、云〻遣はす後常陸守、正四位
下、右大弁を兼中納言兼中務卿を歴従三位小
叙、文武、其子宅嗣、才名あり、性朗悟有海儀、好
屬文、工草隷、廢帝寶字五年遣唐副使小錦、

既にして羅に北常陸守に任ぜられ称徳天王景雲二
年春任満て京に帰り擬従二位位参議後右衛
歴官して牲物部朝臣て賜ひ大納言に擬ず正三位と
加へ歿後詔贈正二位其 他百濟王敬福藤原清
河藤原小黒麻呂紀船守菅野真道等あり之を
子長に比せ殆しぬ

○ 鹿嶋大神八常陸最第一の古名蹟なり近時名所図繪
亦之を行ふ能て遍く人の知る所となり今省略せり

○ 大洗神社本邦歴家の始祖なる屋一近時官歴那
須氏の本朝歴代に詳なり

新治の郡名なるの言葉を初て拙き出雲者
彩貌之十握稲穂と云こと能良田稼多くして雲の出るが如
くなるをもて出雲と云ふ里新治と彩貌と同音なり
さハいくるなる歟屋一

薩都神社薩佐都と尾即久慈郡里野宮佐
本朝俗説志又和訓栞なるに常陸国太田の社造営の
時板の神桟の中に鹿島大神宮の文字あり左右甚分
明なり因て一八鹿島に納べ一八当社に納むと云ふ事なり

静神社ハ久慈郡にして今那珂郡に属せり郷中の一大社なり再考を要す

風土記に静織出ハ久慈郡の西に在りて織綾を設る地にして玉川郡の北に和名抄に見へたる静織出郎今の静村にして玉川郡ハ今の村田の玉川なる歟

此玉川にして部無村等を画家雪村流寓せし地なり

明僧心越禅師本国に帰化せり遍く人の知る所なり書画ハ更なり琴を好て餘音今に本国に傳れり妻〻ハ後篇に出せり

那珂郡に高部村あり〻〻建部の地なるや知る歟又佐竹盛長高部を氏とせり蓋し本地なるや又常陸介義春小瀬氏なり是ハ小瀬村に食色せしなる歟

那須国造碑に笠石にて此碑の上に蓋あり故に仮に名づく此碑を

その始延寶四年四月の比宮城の修園頃にいたり人下湯津に村に住る同郡茂貳郷小口村楊平大金重貞

六人の宝〻にて此石碑あるを知りて是を現出

始なりて重貞世ゐの石碑のそばに行て此を見て那須記にかく書ふ記しかりその後天和三年六月

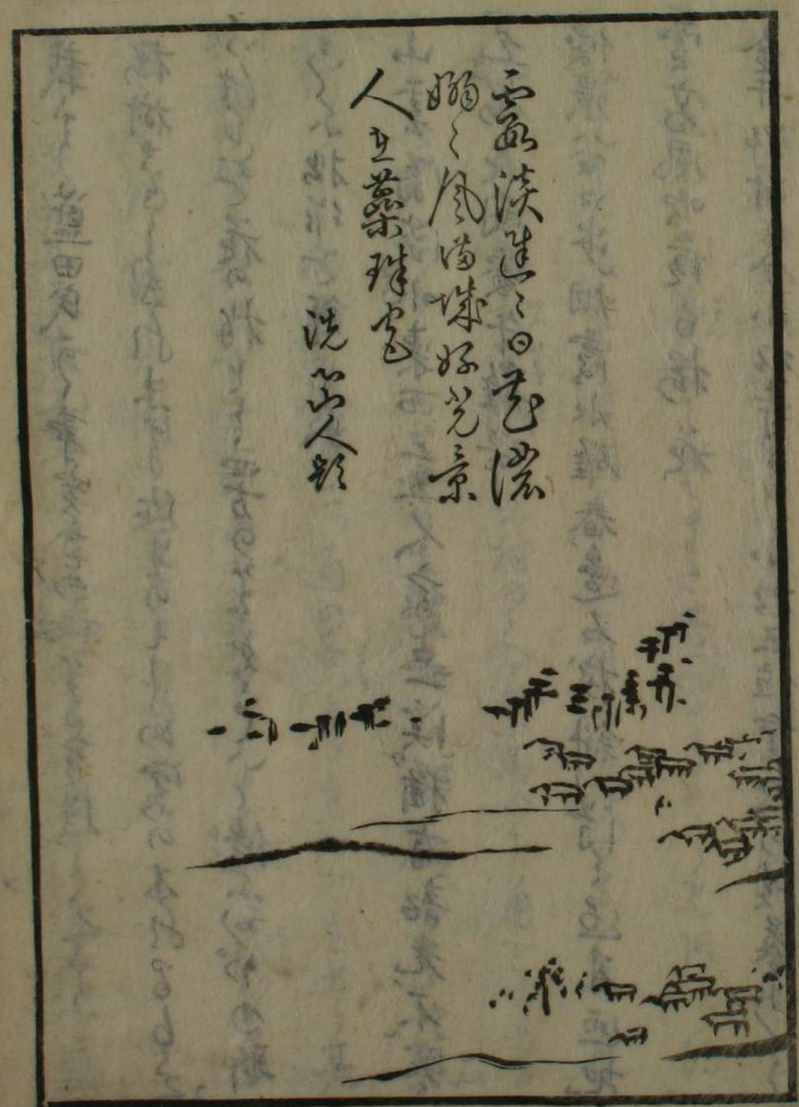
○西山黄門源光圀ゟ那須記主宛ゟ北斗碑のこと
尋さらに貞享四年の秋儒官佐々助三郎宗淳と
人碑文を考へ〻北斗ゟ元禄四年春
有司ゟ命ゝ北一小堂を作り碑を其中ゟ安ゝ
して世人始て此碑の尊き所を知れり
しかれど此碑の年号ゟ永昌ゝあり異邦の年号を
称ゝて後人疑ひなきこと何ぞ也ゟ其辨論き
くありされど白石先生の考ゟ永昌元年朱鳥四年柴
鳥二字上頭一點皆碑面剥蝕之跡耳、據史持統三年歳
次己丑實朱鳥四年也、明年庚寅正月朔持統即位、先是改前朝號、蓋ゟ其攝也ゝ又山崎久卿の說ゟ猶彼
地古老の說ゟ此碑を始めて見出しゝ所ゟ旅の徑驗此地ゟ
来り碑の文字詳ゟなるを何のぬるぞゟ見ゝん自を
ゆして何ゝ文字をこゝろかしお補ひ刻せしゝ偽ゝ
をとゝゟり此旅實坊問の年代記を見合せゟ法ゟ朱鳥の永
号ゟ字畫似ゝるを支干を以て強て異邦の年号ゟ作り
しゝる歟ゝ北ゟ永昌元の三字結体敦鈍ゝして他字ゟ
類せ所今搨本ゟ就て捡ゝるゟ昌字全ゝ鳥字の畫ゝ存

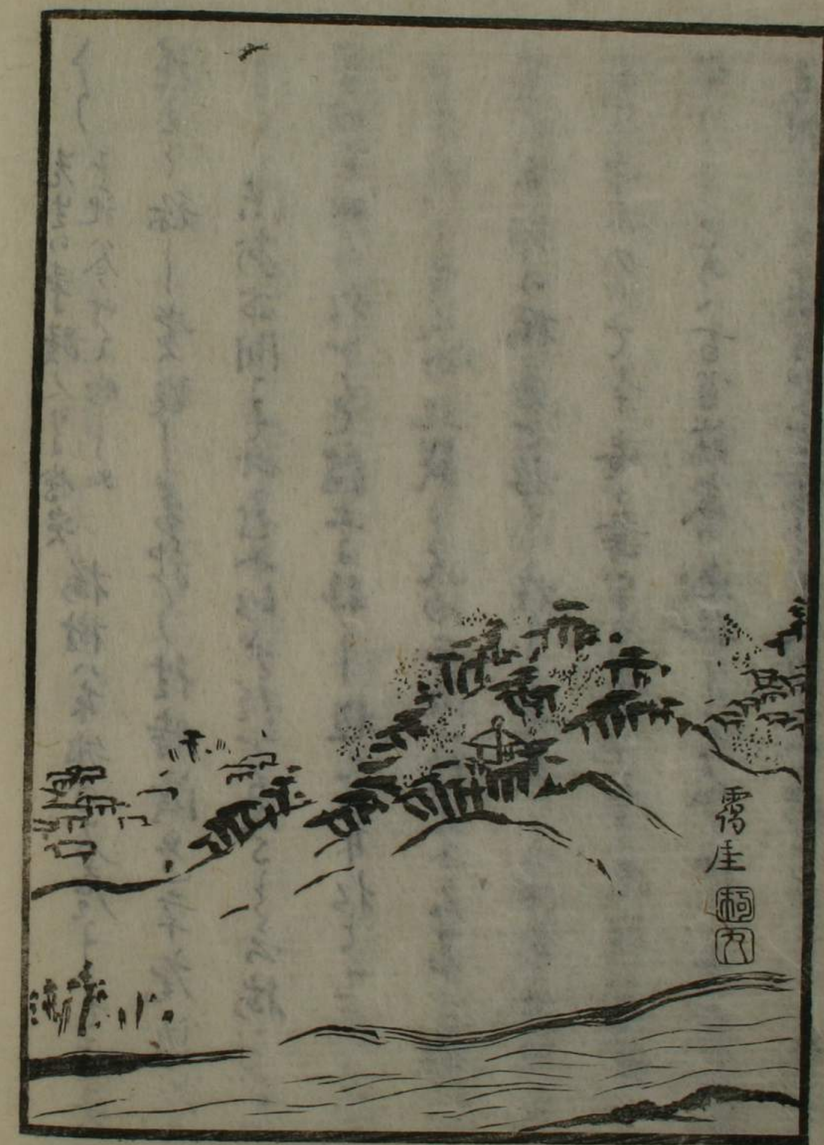
元字隱くれ四字の畫見るこの筆に係せるが如く朱雲
なるべしとなり紀は佛足石及び多賀城碑多胡郡の
碑より先きなりて古く正しくまた我　邦第一の古碑にして
吉田神社今筑紫郡小屋せり一大社なり昔時は那珂郡
に屬して吉田郷と稱せ花と古名蹟なり再考せよ
本邦の橘樹は異國より之を移し植ゑ時に舶来船の徒爲に採賞
せるべし今水府大城の東北に舜水堂あり明微士朱舜水
先生を祀れり先生生平梅を愛せるゆえに今祠堂
の傍に樹を植ゑ花時の美景欽清雅なりと水府中の勝境

六

となり　先生の事蹟人口膾炙
せり紀は今略して略す

橘樹は本邦の名產なりて古来
花を稱し賞翫し素絹に往時渡唐幸尾張
ゆきき洪波西湖を此花に比する云橘を
昔時本邦の杜と也造を移し植て日本杜と稱せ
るより往く古人の紀載する西湖は彼土の名勝なり
把力く本邦の橘花を移し植しゆえ因て云伊東益四文
集の中に詠して幸庵の壽字の筆記あり其說は往時幸
庵なるもの八百有餘歲の老狐にして人に化し房總の地に
来往して壽の字を書してくの乞に應せるなりと奏く


霊渓道〻
頭〻風流塚好芝京
人主藥雅堂
洗心人新


雪庄

載せり藍田氏の事實ふ高誕なる事復よろこべり
梅樹さきゝまれまれ作生のそゞめ霧の本ふ多之
ほとゝぎす花の梢をとゝ四方のさゞめくとゝいと優ふかゞ内聊
さゝふ拙作を錄し奴
山雲淡淡水東西三五人家点二溪猶有韶光不寒
乞梅花開處午雞啼
侵晨谷口步烟霞水碓舂邊石棧斜清遠身西地
雲高風吹落白梅花
金井野村ふ今小松寺あり小松三位重盛の墳墓あり

ゆゝり 余未だ知其詮實然れども本國大隅國香りして
平民坂東小文蔓せしまゝ甚西ゝまふしたれ
天智天皇七年常陸國より生角馬を獻せるゆゑ
文化中久慈郡大生瀬云村の人家ふ馬あり角を生せる
す其ゆゝ何りしゝ故ものて彼馬 郡廳ふ召ふ北熙
撫何りしふ両耳の傍ふ二ツ角の点せるものを生せり其
狀梅の如く長サ一寸二三分ありよりゝまふ解て試むるふ
角ゝ何りして肉の起生せるこのも
文德實錄ふ天安元年二月乙丑常陸國より白鹿を獻

せるなり又西又近世南郡四澤の地より白麻を出せりとて此
白麻学ぶまことふ稀なり今山中弦慶白狩毎年
ゝなり文化中本藩　増子毅齋先生予ら郷中より
宰ゝり先生好学旦嗜武ゝ郷中を治む陽春有脚
の名ありこと記すべきさま郷中毎歳秋冬の際人夫を進
山野を跋渉し猪鹿を狩ること狩ふ出る事猟師者の
課役ゝして世を指揮せる支配頭を郷士とふ郷士は騎
馬の武士ゝして其職景を炮術を常とし其先皆武家の
家なり故ゝ日狩あり増子先生霧ふ出遊ゝうひ彼の猟

師を卽ひて山林奇嶮の地ふ馳驅ゝ自身大なる白狩一頭を
獲ゝ歸ゝて世安ゝ以て障泥を造ゝ今ふの産ゝうひ宮
武福を産ゝ
往年久慈郡下野宮ゝ村の一農家ありゝ厩を掃
治せり一小石ありり其色黄ゝして梁の如く粟粒せり馬
糞を掃ゝて出るゝ云ふ往ゝありつる馬糞石ゝ云ふものなり
同郡ふ野上村ゝ山方村あり常陸の國東南ハ皆平原
ゝして世二村ゝ北山谷橋續せり因て名ゝして野
の上山方ゝ云ふ故ゝ古ほけゝゝ又再生ゝ

村ノ坂あり平部（ヘベ）と云ふ古名なり

又部舎村ノ甲發明神あり之の社より発り来れるや

今宮居往古の古帳一冊に存せり始め徳川佐京亮と大

署せり當時何署の人なるや詳なれど村長立原氏

署名為家なりて古き甲と所蔵せり案造精妙なり

と云へり近時是を家

上ずり岑桜と書かりせ村ハ佐竹義舜の三男四郎義定

の合邑せし地なり部舎氏と称せり

八石崎村ノ天女の小社あり社地すり紺青と出せり

而後其地上至の如く起立し苦危こと青く露出せる

ゆゑ日ノ乾して紺青となる即画家之用ゆると云

隣里ノ野村あり佐竹義俊の三男義久采地ゆゑと

又字名野村あり義俊の五男義長合邑せし地

なりと云又小場村ハ義敦の二男義躬食邑ヒし地

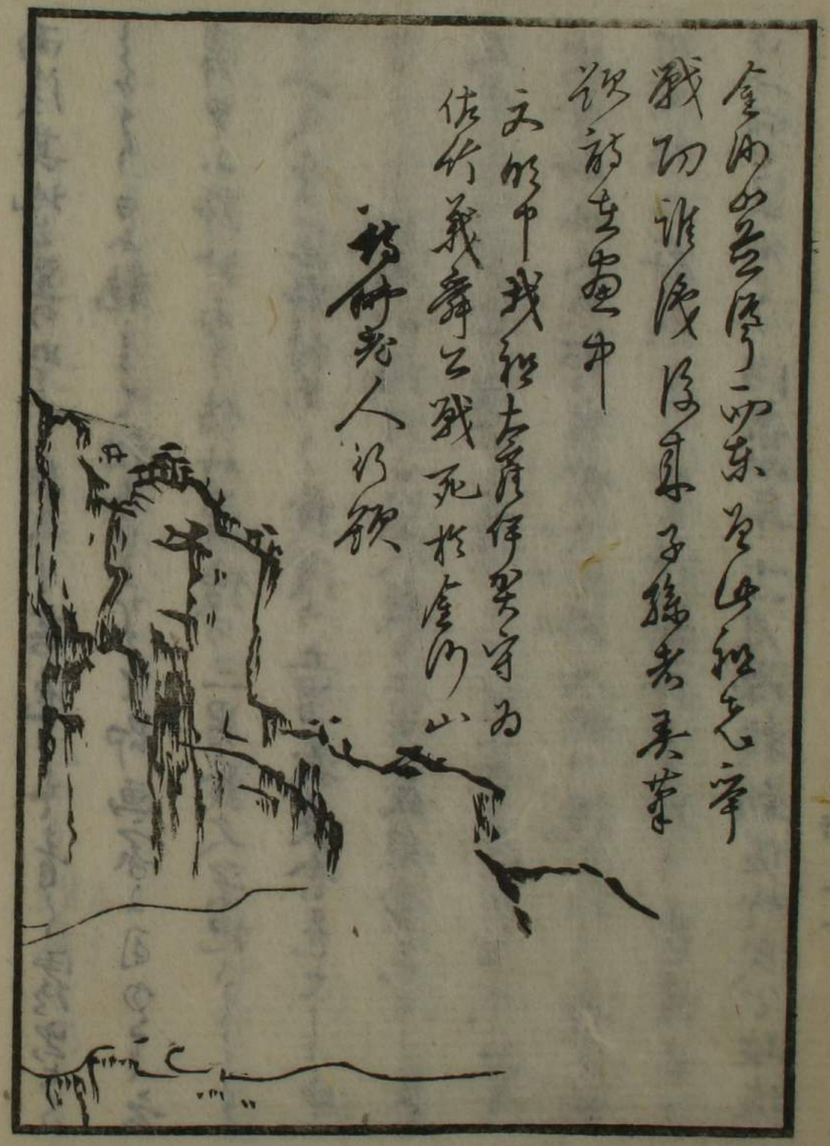
又義仁の二男常陸介し弟し戸村ハ合邑し戸村氏之り

東金砂山久慈郡高倉天下野（けがの）両村の境にあり壁立数

百丈松杉蔚然たり山上神祠佛宇あり東清寺と

いへ密宗なり治承四年十一月源頼朝佐竹氏と攻佐

金門の三度の二四条を以て元帥
戰功誰後侯爵家子孫者天皇
認於玉璽中
文武中我紅太夫伊賀守為
佐竹義舜公戰死於金門山
於神光人行領



竹秀義金砂山の柵を撤て、こゝに拒く頼朝下河邊行氏等
政義土肥實平和田義盛土屋宗遠佐々木定綱等盛綱
熊谷直實平山季重等數千の兵を率ひて攻戦ふ金砂
山頂峭壁絶壁要害天下ふかし西秀義奉を勵し奴を
使ひ矢石のとゝ鎌倉勢多く被傷る諸將兵を勵
しく直あるを仰て天ふ禁ぐめ人痛み馬疲れて敗
走せり時に秀義の叔父義季祝髮して廣常の惨
諫に北義季内より應し廣常ゆゑ鼓噪しく就し
て忠義頂命秀義遣はし花園城に入る城遂ふ陥ちぬ

西金砂山久慈郡上宮阿内村にあり石壁數丈其高嶮絶峻
云屋々に神祠あり山王日吉神すゝ東金砂と同神
にして昔時佐竹氏の柵を築かるゝ東西の二山河北に是
なるを志るし拂もるふ西金砂なる屋きさ此金砂神七十
年ふ一度の大祭禮あり七年に一度ふ祭禮あり田樂の
行事あり田樂八古代の遺風にして今ゆ存するとなり其時世
のさま推して知る屋きさのなり今ゆ長ち北バ後篇に出ス
回郡ふ篠田村あり佐竹義實食邑セしゆ又南酒出
に佐竹義茂食邑にして北酒出ふ佐竹助義食邑にして河北

之地なれど氏よ石ふるすゝなり
因郡上河井村ふ枕石寺あり浄土真宗にて昔時高祖親
鸞来りて日暮宿を乞てりを人大ふ驚き其道徳
深更親鸞の身より光明て放てりを人大ふ驚き其道徳
不可思議なるふ感服し是より弟子となりて敬事せり
なり今ふ其枕石を存せり一説ふ出雲と因郡大門村なり
しふ此地ふ移し来りしを云院を西天師八近世の碩学なり
尤も書ふ工なり六書八躰いつれを妙て得たりと云り余ら
知友なり今既ふ逝せり惜しむ可し

多珂郡森山村の東ふ三日原あり雍尾原とも云り又三箇原
とも云り石部塙の佛廣世祀八後醍醐天皇建武二年陸奥国守
源顕家勅を奉して八千餘騎を率ひて来り佐竹義敦と
池を掘て戦相馬南部等先鋒して進て佐竹氏方ふ戦争せ
りの中世境界ふ活れあり水白沙中より沸き出せり後人
世を歎て如此雍尾原の泉川と称せるものあり深池なり
彼の雍尾の原八山城国挑川なりとぞ
花園山今八多珂郡ふ属せり佐竹秀義金沙城を築て陸
奥国花園城ふ拠るとうふ世祀なるゆゑ花園神社あり土人

相傳ふ神征夷將軍坂上田村麻呂すなわち今滿願寺と云
天台宗あり其土宮峻東海の表ふ傑出し一膳堅なり
同郡諏訪村ふ石窟あり元廣サ丈餘にして其内東西四五十
歩許にして活水あり窟中より流出せり其奥幾許なるを
知らざる
同郡石那坂ふ雷斷石あり圍三丈高五丈許土俗相傳ふ上古
世石日ふ長して四方天に至りしかるに天帝ふ祀ずして惡
みを以雷を下して二つふ斷てむ其一どびより今同郡河
原兒村にあり云云

久慈郡下野宮ふ近津宮あり面足惶根の二尊を祭る云今
上野宮町村と中の宮と合せて近津
三社と云郷中の總鎮守にして一大社なり延喜神名帳ふ
載る稲村の神社なるべし今上郷村ふ稲村と云地あり
ありて小祠ありこれ其遺跡なりと云一説ふ奥州白河
郡棚倉城北ふ馬場と云地ふ近津神社あり支村南二
里餘隔てりて矢櫂村ふ又近津宮あり何れも大社なり
古名跡ふ見えて都て古和氣神社と云馬場を上の宮と
矢櫂を中の宮と云云今の久慈郡近津宮即下野宮なる

すゝきあれとゝ是の郡ゝ古和氣神社ハ白河郡ゝ属せり
蓋し往古ハ此の下野宮を白河郡ゝ属せるゆゑもありしや
前ゝ具論せるごとく久慈郡白川氏の領せるゆゑもありゝ
又岩城氏と領せり天正の比より佐竹氏ゝ為ゝ攻
是ゝ於の沼草ゝより遷移せしなる歟し今其地方と考
つるゝ馬場と上宮とゝ矢槻と中ノ宮とゝ今の下ノ宮と合
せて三社とゝせハ此下ノ宮陸奥國白川郡ゝ属せしゆゑあり
ゝてゝん白川氏佐竹氏とゝ戈争ありしゝ
彼此敵地ゝりせゝ大の三社を割て八溝山を界とゝ今の

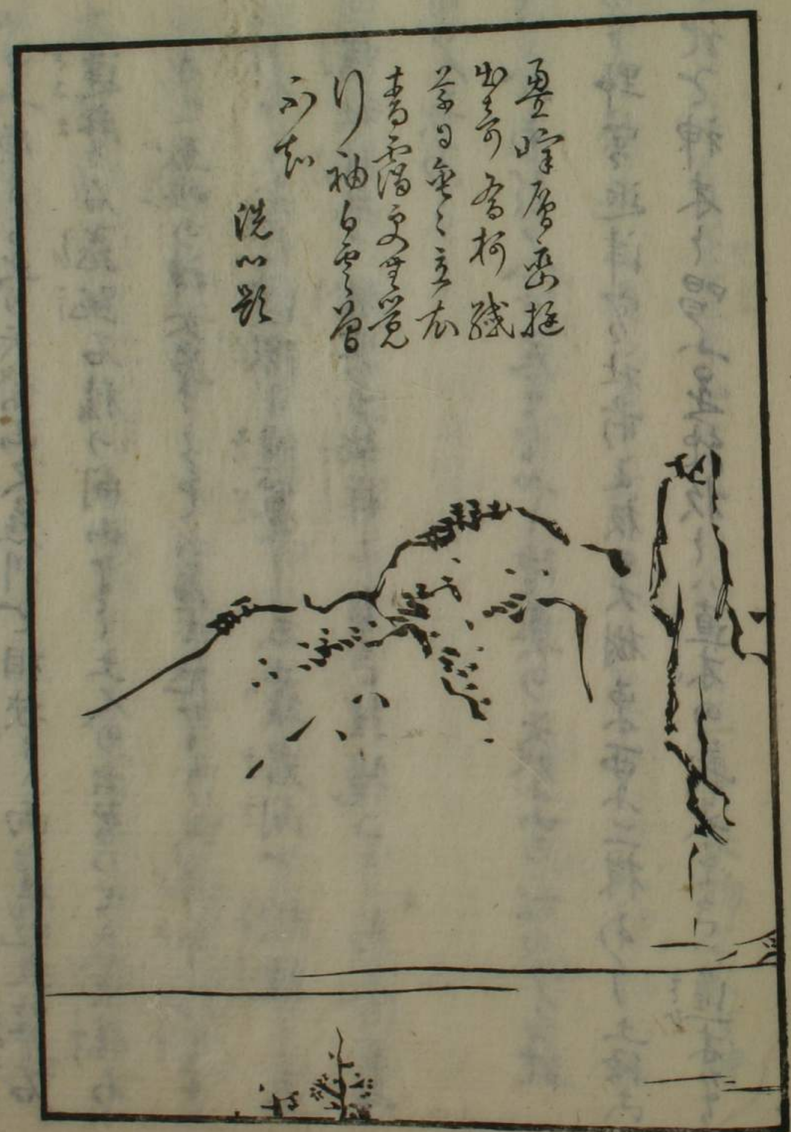
上野宮ゝ宮居を造立し町分を近洋と新創し下
野宮ゝ合せて三社とゝ佐竹氏の祭祀ゝなる歟し因て
按ゝ今の下野宮村ハ奥州と常陸の界ゝして七折坂と云
嶮路あり坂より下ハ久慈川ゝして寇賊の要害なり此の七
折坂より以南を常州とゝ此より以北を奥州と界とする
なるべし今其七折坂より北一里許ゝして矢祭山と
云ふ峯あり両山久慈川を夾んで屹立し尖峯危石流
水を縈纏し幽絶の勝境なり水際僅ゝ桟道ありて陸
奥國ゝ入る是村を關岡とゝ云又下関村あり両村久慈河

と爽やり此地彼西方小云峡中の巫山なる屋一矢祭神
社あり相傳源義家の奥州征伐の時此所にて矢を放ち
給ひしより此地を今矢祭山と云矢の落る地を矢付村
と云即近津宮と崇敬する事なり今矢付村近津社
内に寅卯神あり是永承六年辛卯より康平五年壬寅まで
前九年後三年の子数と合せし崇敬なりし
又白河の関と称する地此地なりしより此白河関なる
の説あり其いつれを是なる事を詳にせざるとは上古
はさて中世常陸より奥州の界西八郡玉川を爽て大
末須村あり常州郡玉郡と野州那須郡との界なり此地昔時五峰山泉渓寺

と云禅寺ありて峯高秀出し云義和尚なる住職
せし名刹なり今此泉渓寺烏山に移せり昔時佐竹氏
東八郡来関あり常州多珂郡と奥州那須郡と界なり
赤水先生東奥紀行に
委しく此地を略しぬ中間に八溝山あり麓に矢祭山笹岳久
慈河等の嶮岨よりて白河関と異なる屋上世八志
らも中世乱離の時に当り戦争たびたび止まらず
邦域の境界もたびたび遷移せるなる屋今地方を
考るに奥州と常州と界河北を山河の嶮よりて區
別ある事従来自然の形勝にて所謂天然の

十六

十七


洗心亭

こゝ屋き是の矢祭山久慈川と相挾く西崖屹立筆石
達磨石花跳石猿の岡山なゝ土人の云習ハせる景勝あ
りて巫峽の神女峯とゝも云屋き地なり又瀑布石窟な
ゝ多く光杉溪隈ゝ偃蹇し茲蘿岩間と繚繞し春
曙秋晩幽人騒客の徜徉も屋き佳境なり何人うゝみ
ん歌あり

心あ[illegible]人ゝ見せでや陸奥の矢祭山の秋の夕ゝ

下野宮近津宮社前ゝ板の大樹東西ゝ二株あり土俗ゝ
此を神木ゝ唱ゝ是板ゝ〻直木の義又もぎゝ直木なり
ゝ也云此木の生立なるやきゝものゝふゝして正直の表物なれゞ神
木ゝて神前ゝ植るゝゞ古き文ゝも石上振之神招ト云
芳葉集ゝも三諸の神乃神板まゝ神之祝我鎮斎板
原ナト見ゝてり
馬場近津神社ゝ日本武尊召ゝる鎧一領あり今神庫
ゝ存せり其精造實ゝ神物なりゝ云或人云甲ハ鎧ゝ此
もゝ兜バ玉下ゝ粗糙なるゝ何等の事ゝるや知る屋ゝ此
大子村ゝ大子ゝも云官府の古城跡あり芳賀河内守始て築
りゝいつの頃ゝや白川氏ゝ兵ゝ此久ゝく白河氏ゝ屬

とりと云後石城氏より英とり祀嗣を絶と云支すり石城氏家
臣をしく守しむる事四十餘年まして佐竹氏ふ英とり
祀城遂ふ廢とりとすり城跡より長松一樹ありて偃蓋空
翠高く雲霧を拂ひ奇古愛とる屋しく然るふ郷中
の土俗常より松根を割りて灯燭ふ充つ山村此屋皆然り
思民中とも祀を此松樹をも削り充祀り往時都宰
増子先生是の樹の彼らあり枯祀果なんをを惜しみ
竹をとして垣とし此の樹根を圍み思民のかしくまふふ痂
つくる事を禁ずるしらん人遠き山よりれを此の樹をも

いつとなく伐れぬ志らしてすりしていつしか此の樹を遠ふ
祀祀ぬ山民の爲まして事情より嘯きあるを祀をを
まるしをや元事物の盛衰興廢皆是自然の數あり
まや山下より鎧の淵とあり土人相傳ふ城陽ゆるとき
城を芳賀氏矛を投せしを此川源八溝山より
西すり出て下野國那須郡須加川をもぎ久慈郡上
金澤閑田山田高岡上沢の數ヶ村を經て大子ふいたり
久慈川より合是を押川と云又鷲川とも云此川ふ
流まして舟揖の利をしくとも數ヶ所堰とも

のあり て流れとぐ溝渠より田畠へとそそぎ入るの
此の流れより数ヶ村いうかと旱魃ありても稲粱枯
槁の災を免る是の水源八溝山の大林麓より出て淵源
ある也なり

大子村ふ卧雲山永源寺と云曹洞宗あり開基を源庵
宗永居士と云是本藩宮寺氏の祖なり一巨鐘あり
益子氏傑山秀英居士の寄附なりまた當寺もと四
住職入院の式八余う家より山四八院せる古例なり又
白雲山あり愛宕山と云将軍神と祭れり此の神

川山と云村より益子氏の祖移り来るとり上古八十二所
神鎮守なるより又天神の社あり願誓寺と云浄土
真宗あり又浄光寺と云天台宗あり祈願所なり
また修驗文殊院あり
比羽村南台山と云峻嶺あり嶺上半ばして持方
村なり此奥ふ安寺村あり此二村八高倉村ふ属せる
本國中随一の深山なりて土俗の質朴太古の風あり
近き比まて八文字も通セざりしとなり 余往時是のさと
貉窟と云字よりなりて

詩人到此古来稀但ホ詩人く到稀但有詩人堪叙
莫ホ堪叙莫郭公飛郭公一名畫胡ものもろ飛流のゝこゑもさびしくなりしかり
比叡村長福山あり山頂大悲閣あり又三光院あり幽勝の
地なり山下に長福禅院あり郷中の名刹なりて河内
国流れり北なりして南に西金村あり温泉湧出せり地
て湯沢と云男女諸病に最も疥癬に効あり
紅花上古より学陸の名産なるべし舊記に見ゆ久慈
郡大田郷を随一とし郡珂茨城多珂郡皆出せり海
内紅花を出せる地多しといへども水府を上品とも称ホ

逆世人情浮薄なりて事に利を先とし製造粗抹な
るべし凡産物ハ天より賜ふ物なりて乃チ是天物なり忘
精制衣を要とせ屋しく
紫山ゑとりふとの本邦のごとく異國をもとく称呼
せるべし又草人蜀人なりとも云ふべし葛原詩話ふ
見えたりまた山中呼子云ものあり即是を謂
なり余山村に遊びて
藤蘿遶路〻難分一搭溪村只隔雲燒炭烟從山
腹起驅禽聲自嶺頭聞

紅日入林鳴暮鶏半山茅屋繞溪斜草人相對
無由語一抔秋風蕎麦花

ゼヨ云上古ハ綿なくして麻布のみなりと書記ニ天日槍鳥
神為作木綿者云々縣掛木綿云々又木綿榊ナト
見タリ又凡絹絶絲綿布並隨郷土所出ト云々又一戸ニ
貲布一丈二尺ト云々類聚抄曰唐式云貲布漢語抄云佐与美沼敏ト是ハ麻布なるべし上の為
記と考ふる綿布と麻布とかたり上古ハ綿とふとの
概々なる云々尤近世の綿ハ吉貝草也
て上古の木綿なる中世より蕃船の品くるぶ今地

方と考ふる者時常陸より布を調進せるとふとの麻布
ふるる疑なきもあるべし今常陸の地麻を生せ
古貝草ハ別して品なり綿ハ總して暖國の産すて北國
まで地なり蓋し本邦上古ハ綿なしと云説ハ北國の
ものなるべし
東鑑ニ治承年中源頼朝常陸國鹽濱大窪ゼ矢
ホの地と唐島に奉もるすし見なり大窪ハ多珂郡大久
保村なり大窪天民氏の父宗春此地より久慈郡池田
村楊岡氏の家ニ婚なり先生を生めり後宗春江

戸に来て醫を業とし江戸に終をとり是より〜て先生
江戸の人となれり其先武名の家なり今儒をもつて
起家し詩名大に世に鳴る
後深草院建長年中笠間城主前長門守孫原
時朝唐崎の社ふ宗板一切經を納る事あり世〜に知る
をの秘なり余う友人好問堂山崎氏此零本阿毗達
摩大毗沙論を所藏せり巻末に時朝の題名あり跋
今五百七十有餘年豈ふ奇なるかな今此ふ時朝の題名
を模出し以ての好古の志を示す

巻一百六十一切經内

建長年中見長房藤原遂供養

上野州
前長門守藤原朝時
笠間

此のまゝ新和歌集第五叙教まとゝ
都野宮秋綱の家に寓居の
間のおもなり

此書公家
氏卿字

厳島の社にて唐本一切経を供養し侍る時日こころを
面白くすみ侍りしを空にあてをもしろく供養
とけぬるこそ
今ぞしる心のやどるあきぬるん神代の月の影をうつして
この〳〵
千ちやかる神代の月あらはれて心のうちハ今ぞあきぬる
考國誌云後五位下長門守兼左衛門少尉藤原朝臣時
朝食邑笠間地因地為氏時朝出自藤原道兼善和
歌云こゝ花宇都野宮の支流なり又按東鑑笠間左衛

門或笠間判官或長門前司ナト往〻所記非一文永二年二
月九日己酉丑刻卒年六十二ト云今古碑在楞厳寺溢晏菴
海云大居士ナリ九月十二日卒ト見ヘタリ年号ト矢セリ
何れか是なるや今必ず其説を兼ね存セリ
正木湖郡河郡村松村ヨリ此湖鯉魚最ト多シ味ハ
美きるあて上品ヘリト云又鰻鱔ハ味尤美なりと云
此土平沙にして東海ヨ近し一望千里ト極む清涼の佳
境なり天照太神ト崇祀り傍ヨ虚空蔵ト安置セリ
大神ハ坂東須禰の一なり又飽ト事池あり正木湖ヨ比

人去松楷鶏刷翎魚跳柳岸
漕窺汀烟凝渡口蘆初白霜染
山邊楓失青行杖日斜行旦遍
蓬衫風冷添来一箇新
詞家描清天然好畫屏
洗心題

並ヤリ此海邊東南ハ唐島浦北ハ勿来ヨ綿連ヒ平
曠の地ヨリ殊ヨ魚鹽の利あり常陸の中央邦珂郡ヨ
ヒて邦珂の湊ヨ比並ヒ遊覽の地ヨリ
完倉村あり むらしハ河内郡ヨリて今ハ新治郡ヨ屬セ
此村名ハ倉の字あるバ蓋ヒ上古屯倉を設ヒ地ヨリ城
跡あり菅谷隱岐始て築く商孫世ヨ居れり天正
中佐竹氏豊大閤の命を受て南郡三十三氏を滅セリ
菅谷氏モ位を失ひ越前ハ奔ヨ云ヒリて佐竹氏
家臣大山四刑部をして此城を守ラシム後相州ヨ徒ハ

及ひて城廢セ呆恭寺ヨ云曹洞宗あり郡中の名刹ヒ
此山内竹を産セリ まり尺四五寸餘ヨリ
玉造村あり行方郡ヨ在リヨ新治郡ヨリ屬セ
大掾氏の支孫行方宗幹始築リ其孫小高六郎元暦
年中源義経の先鋒ヨリて屋島の軍將熊登守教経
ヨ血戦ヒ討死セリ源頼朝其忠死を憐み厚く其子を
按セシムヨリ後累世ヨ居城ヒ玉造ヨ太郎ヨる
モノハ天正六年戊寅十月廿四日死ヌ尭永源寺ヨ法名
其子ヨ左衛門尉重幹天正十八年庚寅二月九日佐竹氏の

為ふ大田城よりなを殺さる能遂よ嗣を絶つと云法名我秀
常見と云
筑波山八常陸第一の古名勝にして遍く人の知る把なり
且名跡志等等よ行り能籍甚しれハ今是よ略しぬ
足尾山あり又葦穂山とも云て此山下の南村を尾谷と
云尾谷山人と称せる醫生あり小河原氏にして其先子
葉黨の支流にして武名の家なるも山人博學篤厚
にして醫術よ秀しく著述を数部ありて世よ行り新
其学老荘仙佛よ淵源せり兼て本邦道学の始祖なりと云

第葉集よ筑波山就名の多きを詠せり今南台君田なるれ
山中彼大名まく巣を営むるあり　余山中よ遊ひて詩を
賦して當て是の事を記せり
過盡田園不見邨合歡花下水潺湲隔林偶聽木工語
前路朝来就鳥援猿
路從緑水漲邊傾畠在白雲横處平一鳥摶風枯木
折深山日午狖猴驚
鳴峯故城行方郡よ在峯嶋左衛門始て築り應永
中鎌倉持氏ふ従ひて氏憲の為ふ逐能峯峯大炊助

駿河に住持氏に従ひ戎功あり子孫世々世に在城し
天正中佐竹氏の為に殺されて丘墟となる
同郡堀内村に故城あり慶長元年佐竹義宣の家臣
小貫大蔵始て築り同じく七年義宣相州に徙る
に及て城廃せり
武田古城同郡に在武田　民部大夫始て築り民部
のち淡路守と云天正中佐竹氏の為に滅
同郡板来村長松寺と云際禅あり鐘倉建長寺
と同制基なりと云一古鐘あり相模入道高時の寄

附に云文十六羅漢あり唐の賈休の筆せるなり
重舟に画る寒山拾得其他源頼朝の植ゑ給ひし臥竜
梅なりあり一大石刹なりと云屋
此村に宮本尚一郎なるものあり名球字求玉茶村と
號せり博学篤厚の士なり其先武名の家なりと
郷中の甲族なり宮本筐村氏の分家なり　又屋上に能望山
湘江の斑竹学邏雖文樹楊梅紫荊の数種を植ゑ時
西山黄門源光圀公亭を御築ゑ給ひし殷湖と名
つけ給ひ平生逍遥せ給ひしなり茶村の祖

西なるもの此亭を賜はるとて云ふ湖亭の三字
西山公御筆まして着色の麿の絵もありとか
其他明人夏仲昭の筆なる竹の画及ひ芦葉の澄泥硯を
を国〻〻〻なるもて云ふ家まて牧溪の画なる観音
と所蔵せり虚堂和尚の賛あり大堂國師の題跋
ありまた一休禅師の模本もあるまたり紫野大徳
寺役僧其他狩野誉朴の添墨等あるまゆり
此地舟船輻輳し妓楼もありて常陸國中の小都會
なり其他名所多して再考して後篇に録せ度し

同郡延方村あり文化中水藩小宮山先生嘗て此郡中
を宰せり先生博学温厚にして下民を教育せり
実に近世の人材なり此地に学校を設け旦つ　聖廟
をも建る此境長松蔚然として霞浦に浮立し
一望胸襟を豁にして山下に蓮池ありまた美観なり
古人澤田氏此地来り学校に預ち又此村に普門院
と云寺あり一大名刹なり地蔵堂あり世人偏く尊
崇せり　余往年此地より板来牛堀等の地を過るとて
平原素丈又高丘詩水茅舎住潛幽黄鵠一聲出

巣去香風習々落杉球
又世村曲り松とりふ雲ふ一友人あり余少時世地ふ遊ひし
勿友両三輩と櫼瓦及ひ佐原ふ舟遊せり彼友人
聊う為ありて世行と果さた詩一章と寄せり
相約佳期豈猶後人間風日隔娯問君今少孤
蒲裡花柳春光時有云
世友人既ふ下世せり彼世一時まと京しむ屋〳〵距今三
十年恍として隔世のとし
又田嵜氏あり学を好て医と業とし最も其術ふ長し

甚僻里ふ窪木幡統るもの世あり性温雅碩
学の名あり延方学校と主宰せるとて云
茨城郡小川村ふ古城迹あり園部兼泰始て築り
兼泰の子孫宮内大輔佐竹氏の為ふ滅せらる佐竹氏
の家臣茂木上総守とし〳〵世城と守るしむ後ふ戸澤
右京少進居城せし〳〵地幾ひとし〳〵年綱城ふうつるふ
及て墟とし
同郡完戸村ふまる古城あり完戸家政始て築り八
田知家の第四男と完戸四郎家政と云源頼朝ふ仕へ

建暦三年五月和田義盛兵を挙て北条義時を攻る
政宗族知重と同しく北条を救ふ義盛の子朝夷名三
郎義秀旗力絶倫勇名天下に聞ふ是の日朝夷名
力戦して死を以て志とす故に諸将其鋒先を避け
懼るゝ所雀の鷹鸇に遇ふが如し朝夷名深く琵
琶橋に入る猶ほ家政進んで朝夷名と戦ふ遂に命
を隕せり世伝て一時の美談とす其孫世に世臣に在天
正年中佐竹氏の為に亡ぼされ後和田河内守世臣に
封せらる北更に西州に移りて城廃せり

同郡小幡村に又古城迹あり八田知重第三男光重小幡に
采邑し小幡氏と号ふ光重の後中務なるものあり夜大
洗磯前明神を拝せ江戸但馬守兵を出して路を遮る
中務命を受て小幡氏遂に滅せり江戸但馬守家臣出
雲を殺して守らしむ出雲死せるを助兵衛代りて居れり
天正中佐竹氏の為に滅せられ助兵衛子あり三十郎と云ふ
石塚村あり茨城郡に属せり古城あり佐竹宗義始て
築せり其先刑部大夫義篤の第二子世地に食邑し石
塚氏と云ふ宗義の孫大膳義胤北条氏康と戸部

野宮の地より戎 矢まわしして死せり義亂の子義衡佐竹
氏より從て窪田より戎 命を受て義衡の子を義慶とゝ
義慶の子を義國とゝ源一郎と稱し 天正中佐竹氏
常陸大都督となる義國を 片野の地に居し 東中
務義堅を石塚城より封せり佐竹氏移封せし後も
まゝ廢し也
此村某師堅を殿あり古名跡なるす 委しくハ再考し
後篇より錄す也
長倉古城佐竹左衛門尉行義始ハ彦治郎と云又別當

と稱せり二階堂下総守頼嗣の女を娶りて六子をもうけ
長を二郎貞義と云後別當と稱常陸介に任ず元弘
年中遠江守兼上総介に轉し後薙髮して信となり
上総入道と號す次を三郎義綱とゝ是三郎義綱
此地に始て城を築き世々居城し相続て世々長倉遠
江守と云て應永年中佐竹義盛死し義盛一女子
ありて嗣なし上杉安房守憲定の第二子を養て嗣子
とし其女子を妻いせこの地を義仁とゝ右京大夫に任ず
鎌倉にあり而るに國氏義仁を君とせる事を肯んぜず

是れ養ふすして先君の種ふあるを以てすりこれ
を一ふ山入師義うる興義を上給ふよ任じ立て君とすを
鎌倉持氏せすて怒りて石松持國をして師を帥て
佐竹氏を伐つ國人興義を奉じて大將とす長倉城ふ
據て拒を拒く持國城を圍む攻戰數月すして援と
對営歳餘佐竹氏糧食已に乏しく籠城危よりて新
國人相議して云義仁立ハ君なすし興義立ハ國なすし君
なすし國なる能ハ佐竹氏の立るなり國と君とをふ
云くして佐竹氏をびハ不忠尤も甚しきなり君を

とを國ふ存せんよ國ふ石松持國と盟ひ義仁を立く
君とし興義退て義仁を服す義仁ふ又國人の望あり
ふすを懼て無義を厚く遇して敬ふとして城狹少
すして山河の險矢石の衆ふ乏しといへとも甚堅く久しく
存せるを豈ふ幸のみならんや
大岩村ハ岩あり數丈地上より突出せり也不大岩の名あり
村長竹内氏古く此地ふ住めるすし屋後古木鬱然たり
一夜ふ響ありて何やらん響あり其韵僧寺の木魚ふ
似たり是れ乃チ芝ふ古くふ入せる鐘のなり鐘

たるべし又下檜沢村は邑長小室氏あり屋敷
杉板叢中毎に此音をなすより此両家は何れも鹿家
なれ郷中の著姓なりかるに奇事を記せる怪しき
とゝるの議り免るゝ所なるべし称とこれを余の親
属なれ是もしまた四人もしらるれハしらせり
竹内氏嶮谷老人と号し又愛筠亭と號せる也
と善し立の人なりしら今ハ既に世をされり小室翁親
魚亭と号し文雅を好み風流の石なり老健今ハ
存在せり小室氏家の紋日の丸と又九ゝるの丱紋なれ

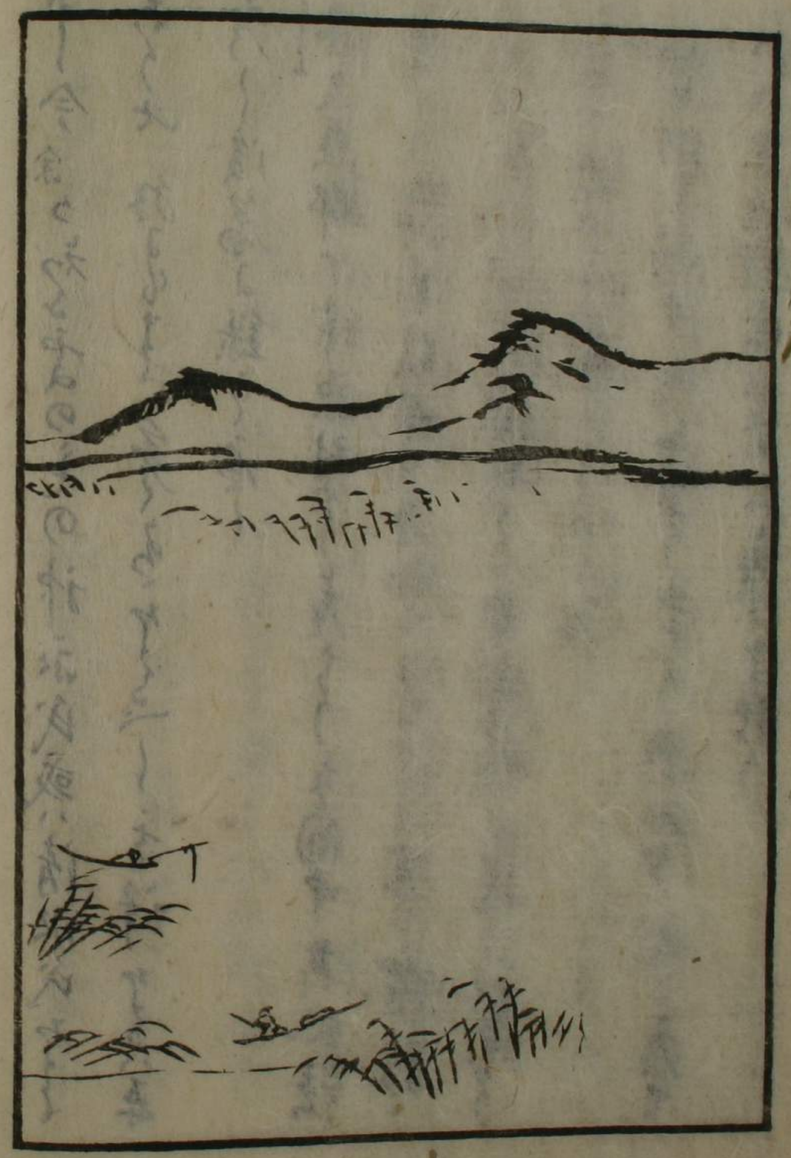
其先武名の家なり何の比なりし歟の紋を用ひ来れり物
は此郷古しへの廣畠郷なれ小室氏ハ廣畠宮の氏子
なり者崇のあまりに此紋を用ひる歟し（廣畠の神官ハくまの）
の也ありて熊の紋を用ゐる
なるなり　同族を羽州にあれて今佐竹氏に仕へる家
本邦山村水郷秋夕閑適の情を詠じて三ツ伝れたり
てゝ今もなり是れ明人謝在杭の海風苦雨を一ツび
黙破と經況で使境とするとの意よりかなり
余彼此の意をもとゝき巴調一章を詠せり

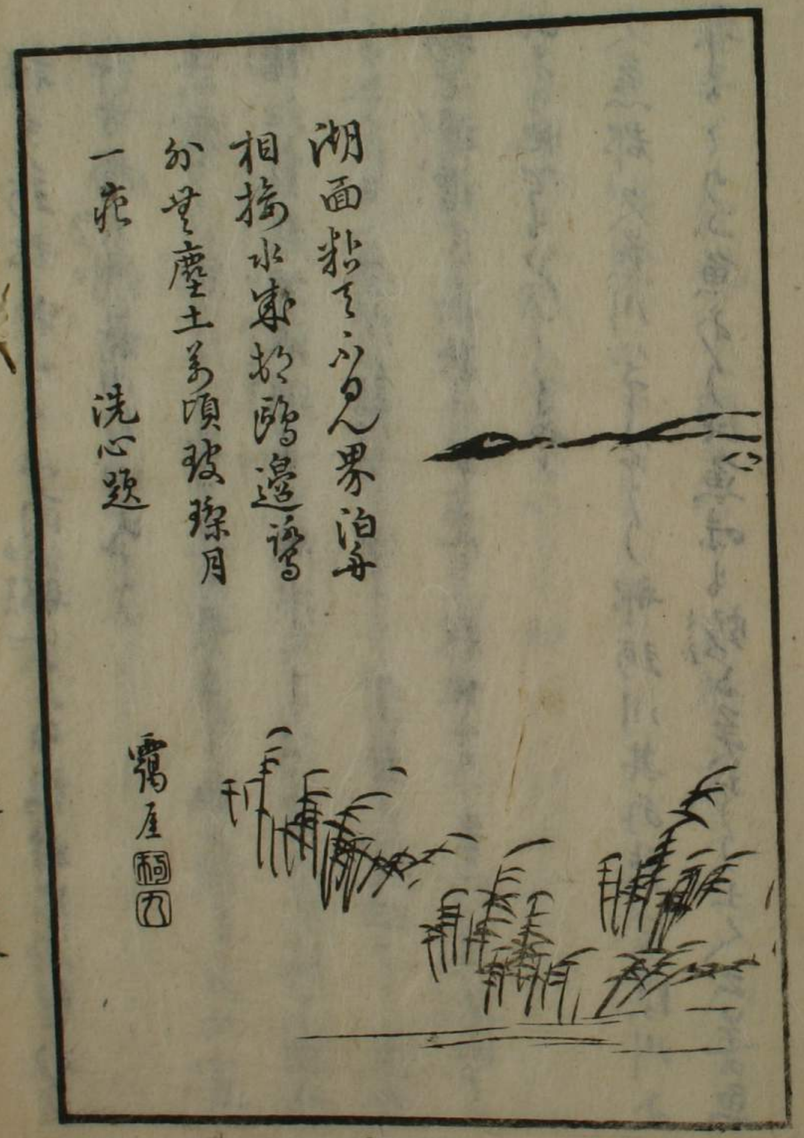
間中伐杖旦間行兩尚晴来風又清鉾日照山人
鋤歌樵牙枯木一聲鳴
余ら郷里ふ櫟の大樹あり四あり此樹を伐とり余此
樹を乞得て材とせんとすふ一丈巳五尺許にして西股ふ
まの形此変うろうろしてうちすり羅髏若干を出
せり未ユ大ゑ怪しみ余ゑ告て材を元るゑを戒めり
余ゑ此樹うち朽て空洞とせり狐狸のすひ
極ていつしか死しとの枯骨を存せるゑ形屋しと未
ユ云ゑ弱弱まろくして骸骨ふ似たれハ少しく大すり

まく歯のごとくもあり又ゑ足のごとき
て狐狸の骸骨なるゑ疑ふ
るゑを如何等のことゑ知る屋ゑ
陸奥白河郡真名幡村といふ所ゑ古祖あり杉の
大樹あり一夕暴雨迅雷あり此樹を焼ひうちふ
洞穴あり蛇形のもの焼死せり燃膏凝結し臭
悪近つく屋うしゑ骸骨岡でなもりとゆく又郡珂
郡額田村ゑ杉の大樹あり一日雷火ゑ焼失し頃ろ
多く出ると云又予ら一友人西金村神永氏樂志園

号し醫を業とし景る其術を秀し郷中の名士さ
り神永氏者日南台山中の岩間を拾骨若干を見
出せり其狀蛇ふ類せり世れ何ものなる事を知氏
久慈郡佐竹村を古城あり佐竹義亂の第四男小川
五郎宗義此地を領邑し累世城を築いて儲里
大澤村を根渡神社あり社内を大旦那小川彈正左
衛門の名を記せり是も同族なる歟し今此城跡を
舘と呼て此変ふ人家八九軒あり家く甲或ハ鞍刀
鎗おの武具を所持せり相傳ふ小川氏の家人なる

し今余が知る変のものの神永氏或ハ清水氏なる
あり也 外すべき多くあるべし之を詳なるハ再
考し後篇を録を度し
姜久慈郡下津原村より産せり本國中其他諸
変より出る姜暖國の産物なれ共も寒を懼れ
もの也今下津原村より奥羽の國を送り陳列
六常陸の名品なりとふ度し
柚は柚本國中諸変より出せり奥羽之國を産せ
ば也不延時常陸の名産なり




湖面拍天月人畧泊每
相掏水家於鷗邊響
分甘塵土多頃玻璃月
一痕　洗心題
霽屋

椎多珂郡秋山より以南油那子までの該村比屋皆あり
行方郡大洲新田村田氏より
上へ載せり銚子より出るもの最多し銚子浦より以北箕
幡江霞浦涸沼浦等の湖水あり いつれも東海に朝宗
し今江戸へ奥州北國へ運せり常野の奥郡より該産
物を運漕せる水路なり尤も勝地なり昔時波逆海と
世ふの地なりしよや
久慈郡久慈川はなはだ多し那珂川其外該産溪川に
いづれも魚あり此魚味も頗る美なり土人云是の魚

春半より秋晩まで朝夕鳴く其聲さながら愛し
つ屋し能流のかどなく響るのあるを聞の先
に云句あり又 谷川にかどなく那珂川にかどなく
なぶるも水の義あり なを考へ讀て其ことわりや
もとなく久し志ら何れもものまつくかぢりあり蛙
なるべし其貌小さして色ろ〳〵中黄なるべし京師北
山矢流の邊谷川のなれ清き所なるべしと
今僻邑の土俗知らずいやしきものをハナタレト云此
語古へいふなるべしとそれところあり日本書記二

唯有残賊者一曰真菌

菌種類極く多し土俗菌を食してまた毒ふ苦しむ
ものあり菌の性卑濕の所より生ずるゆえ
ゆえに事なり　胡桃蕈あり　胡桃の根より生ずる
味もよろしきの蕈人賞し食て盖し魚肉と同
食べ屋うるに小毒ありと云て
椿木と称する樹人の知れる木にして香木と類す土
俗墓蕈ともいふまた柏の実大菌香よく似て毒
あり忘れて食べ屋うるに　余が隣里の実を食し

て死せるもの三四人あり尤も心得屋さるべきなり是葉
を水に浸し眼をあらいく眼疾よろしく又亂毒をも
治せり亂ふ咬毒を早く此葉を揉て付屋し奇
効あり毒あれハ効ある事自然の理なり
余が郷里ふ備りて上澤村あり八幡神の祠あり雨降山
と云是境六景勝あり土人云ふ時洪流ともに此地
を過きて　八九月穴て面ふ新柳を植　と云句あり
と今古柳樹あり傍に碑あり芭蕉翁と呼屋り
此の里余が曾祖父の生れし邑にて幼少より此土を馴

もとより往年此六景を詠じて社前にさゝげぬ余駑才ゆゑ
に文雅に乏しく景物浅拙なるを愛々今ゆゑ録しく
刪正をこふ

八涛峯白雪

暁来着一色竹篁與松村孤峻寒空径了宛如白帝躅

南邑寺晩鐘

江村遠杵声野院疎鐘起暮鴉亂飛蠅翻在炊烟裡

稲荷社紅葉

雖瀉丹沙汁染成楓葉枝葉々着々妙枝々更色絲

雅子墳青松

不知童子石留得古墳塋有箇長松樹唯成颯々聲

僊澤落雁

酸嘶遠山下雨歇霧消初平晴水延紙影一行書

鷺鷥溪打魚

水暖魚噴玉風和花舞溪酣晴好時弟莫使漁郎迷

蘆野倉村あり村名倉の字あるハ昔時屯倉の設あり
地ゆゑ屋きず前ゆゑ論次せり此村ハ木澤氏あり農家
ゆゑ又酸屯家金澤氏あり産術を先とし性篤厚余ら

幼年竹馬の友なり俳歌を好て松白と号せり
上沢藤四郎源七なるものありて父母に仕ふ幼して母に
孝なる継母に仕へ其の意を性に出でず読書を培
栽し枝槍はきなり相模及諸菓樹を植て堂を建て
槍数万株を植て　上へ奉る　上より志し厚
賞を賜る時に神仏を敬礼し遂に事ごとに
終に其父義四郎源左衛門昌信なるものに神仏を
敬し殊に　上の法制を堅く守りて敦朴の人
なり余が曾祖父五郎左衛門久敬と云る時人

呼て天狗五郎左衛門と云五郎左衛門は生平
天狗の説を排せり源左衛門は好て仏神を尊し堂
塔を修造せるを楽しめるなり
余が郷里は常陸の北郡にして尤も僻遠の地なり余が
幼少の時は郷党中神事祭礼なれば隣里会集
射或は鳥流なとをなして系しめいつしか弊風なり
うつり金銭をかけものし勝負せるものあり
しのむ　上より法令下りて今は禁止せらるゝ此
すしして後祭事に小唄浄瑠璃なとの流行せ

近き頃ハチョボクレナント云旅人のまぎれもなくそのの
風聞ありしかどもひろまり今ハ見聞の驚れるもそのチョ
ボクレとてもてはやすぎとなりもてはやすのさまかくまであさましく
なりゆくハ嘆息ものなりけるかな
本邦天狗と称せるものの何ものなる事を詳ならず物
說天狗名義考藝園日抄怪異辨斷孔雀楊園記
鬼頭淡護法資治論中一少話近聞偶筆廣西通志
天狗辨山海經本草誌書に載るものと系按するに甚説
紛紜にして定説なし天下野人木村子盧先生余が

語て云往年深夜金沙山を下る溪隈何ら人の居る
樣しるうちまち鳴響林木を振ふて動き
颸の音空中より礫くるに其響頗る人語まぎれ
を數ちり又利負村鏡信寺と云寺ハ幽邃の境
時く松林乃うちより出鳴響て空とあり是即
本網附翼より出る治なるべし其大略如此
なりと其白大略如此なるよ以て云今長谷川流
統家にて笠原山の朝暮を打事を戒しむ乃天狗
天狗なる屋しと云木村翁

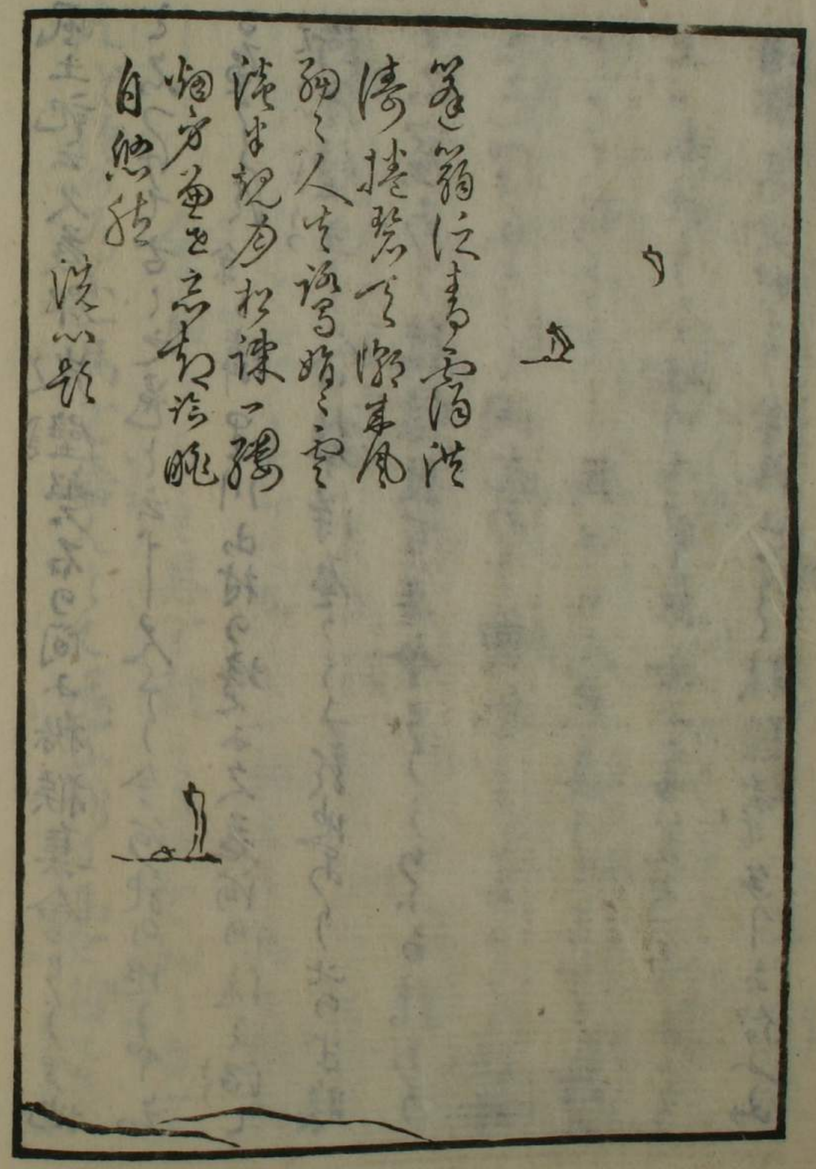
上より命せられ蝦夷

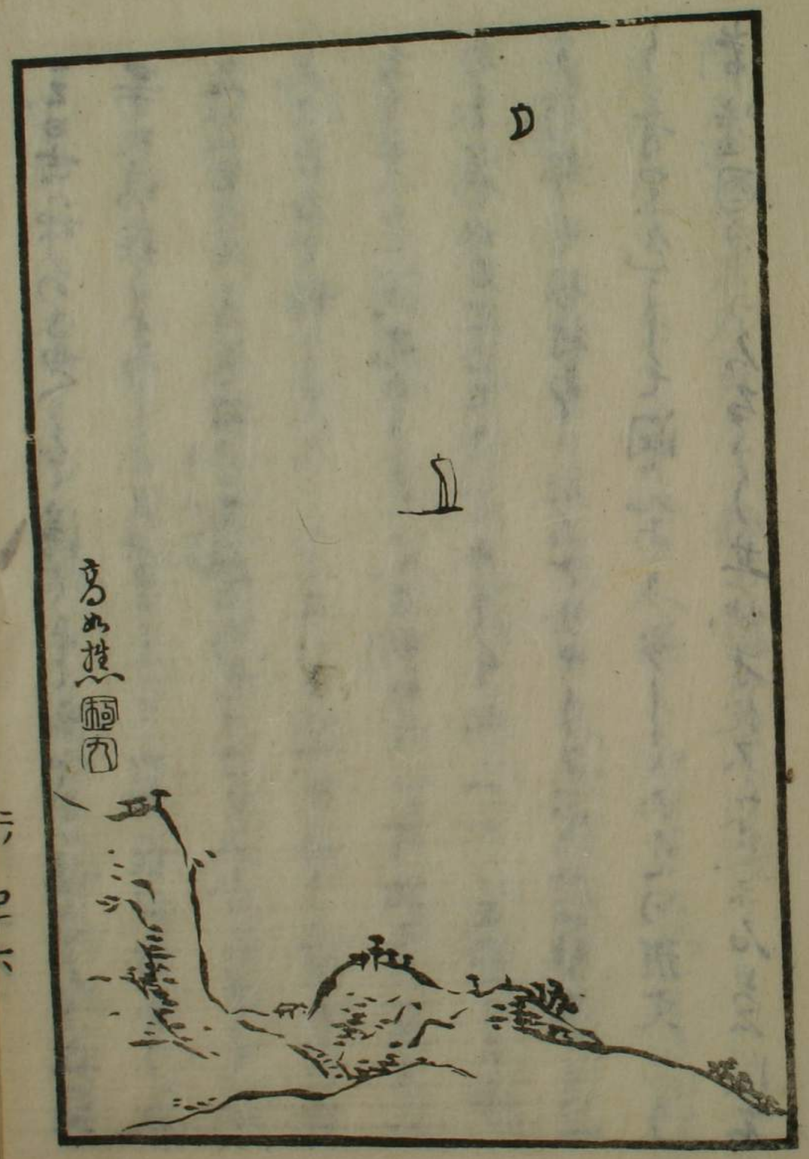
地もうれり讀書嗜武勇健壽をもて終ふ一寺を
余う曾祖父五郎左ゑ門尉久敬字士交号休也又號
石山人任俠すして有勇好義平生好て天狗の說を
排やり光健享年八十有一すして終ぬ
大子村小久慈と云地あり硯石を出すく水をて
まひ久しく涸渴せすすり
天智天皇の御宇越後より燃土を獻せるゆへ今備里
淺川と云村より此燃土を出せり
久慈川深夜網を水底に投して魚を捕ると土人の説

かり出るふ水魂と云ふものあり暗夜水中俄に光り
白晝のごとくなるゆへあり今常陸にもあり
もものなり
橘成季著閑集に建仁寺門三年常陸國多珂
郡に僧あり光猿と畜て僧時に法華を写せり
賀ゆへて紙墨の料すして顧て猿に戮して云汝人
ゆりせて吾に資なきを患て猿つりくゆて
うなはき翌日光猿人家の厩に入て白馬を偷て身
に短布衫を著頭に編笠を戴き鐵を腰に帶て

馬に跨り間道すがらして馳せ行かんと人馬共に疲れ
ゝもおぼえず行人に逢て云く是の先白馬と
えしゝや否行人云今こゝを過すがらして先に牧童の編笠
を載き鎌を腰にし白馬に跨りこゝを人馬
を過ひ程を直て俗家いさり馬を乞ふ俗弱き歟
に廐に入りて見るに果して老猿一馬を率きて俗因
くるのまを詳に告げて馬を乞ふ謝せり馬を感歎
しつゝ會釈をらう恩を報ずるまを知る吾な
んぞ俗の為に一馬を畜んとて遂に俗に馬を授て去れ
りと云

風土記云久慈郡岸壁船石の間に猴猴集會せり此地
とゝつけて古しと云ひ云ふ今河北の地まや知
る屋うしに余う儀里川山村の境に久慈河の流に沿て
斷崖壁立一人の攀降屋うゝに新地あり此の上腹
に石窟あり猿猴数百集會せりうちに白猿あり
毛色潔白にして潤光あり面は紅にして赤ころに臙脂
をぬりて粉ふがごとし郷中の人民集りて生のまゝ捕え
上に奉献せり今磯川市摩部屋に畜ふる又二疋のみかう
回郡高倉村より金沙山にて猿猴多くあり俗に山


蓬萊の書を開き
清境を尋ぬ
弼々人生の
清水流れ
自然詩
清心歌


高山樵

王日吉神あるゆゑとぞ湯くさて云ふ温泉あり疝痛
等の諸症よろしゝと云ひ山南諸沢村あり白
石を出せり白色明瑪瑙馬脳の類なりと云今は戸ヶ水
戸大石と称し久慈郡又釜敲村あり鏡石を出
せり黒色潤光あり人を照映す斉珠寺真弓山
あり寒水石を出せり雪あるゆゑ閑ハあり又愛しに陽
多珂郡町谷村あり班石を出せり又曼陀羅石とも云
り青黒色にして潤光あり少しく白色の班文あり
常陸国中の名石なり其他未伝不詳石異石陰石

陽石迦羅石石英等種々諸雲母出
東海諸魚を出せる事世の人遍く知ること孫なり殊
に鯉魚八束郡と云ふの名産なり又安康魚最宜しと云
石郡坂久慈郡金澤山の林麓ふ在坂より以東多珂郡
ふ属し二箇の郡に亦あり東海を眼下ふ眺望し非常に氣
豁にして一壮観なり
友部古城多珂郡ふ在山直氏始て築り山直氏の祖ハ
元戸氏なり戸家政四世の孫義宗二るあり其次子
家時と云五郎左つと稱せ是山直氏の始祖なり世

此地ハ合邑一六ヶ所にして五ヶ所佐竹義昭の子義昌
と嗣　義昌死して城廢せり
久慈郡　瑞龍村旌楊寺ハ楊の大樹一根兩株ま
て其大さ牛ばかり一屋一盤旋數十間枝葉蓁
くゝり是花蘂のうちハ針ありて旌旗の形ハ似うり
相傳ふ源義家此地ハ營を結ひ給ふ時旗竿を立ら
れしより萌芽を生し遂ハ花を開きてうく大樹ハな
りしにより又此地ハ一空洞あり蛇ありて盤蟠せるゆ
行方郡　玉造村高洲とてハ古杉樹あり優蓋數
十間蒼翠奇峭愛つ屋一　上すりも命令あ
りて毎ゝ培養せらるゝなり陸奥國一の関源
義経の腰懸ハ杉ハ似うりと云此物無杉もをき此杉れ
しゝ少りまと惜しむ屋一此村往時孝子泳作
なりしものゆり愛しくハ後篇ハ出せり
天智天皇十年三月甲寅常陸國より中臣部若子
と貢せり長ハ壹尺六寸其生年丙辰にして此年ハあ
りて十六歳なりと見えり矮人の本國ハ産せりて古
今少なゝ此なりし先年業池風助齊義兩助ま

るものあり いつれも長ケ三尺許なり五十餘歳す
て死せり其子雪助まさ三尺餘すして父の風あり と云
昔時那珂郡ハ石上の郷名見えり 今の石神なるは
掬ハ石上ハ古昔イソノカミト訓せり石上ハ非代より古く
云傳ふるこえ あるあ西の地の村名もいつれも西あり て
称し来れる所 古昔石上乙麻呂常陸守ハ任ぜられ 其子宅嗣もまさに国ハ守たりかれ
えり ものやいつの比れか 而るハイソカミト云しと今いり
又古城迫もあるべし 再考べし
のみと呼来るハ其言葉少しあひ違ふるハ此つ
もと古言の轉し来れる是ハの例最多し 上古五作

と云しと今造と云まさ馬木を茨城と云又多治
比を丹墀と云今丹次と云こと し校筆也 所このふた
又門部村あり 天武天皇帝字三十八氏ハ連の姓を
賜ふ見えり門部直 凡川内直 矢田部造ハ泊瀬
造石上部造川内馬飼造川瀬舎人造等なり掬ハ
凡川内川内馬飼造ハ今の村名大内河内などあるハ是ハ
もとつくなる所 又上世大泊瀬小泊瀬の称号あり
美し今大生瀬小生瀬の村名あり大泊瀬小泊瀬の称
まさし まや 総して村名姓氏人名なり皆上古の称

呼て景慕し玆来れるものなり音訓まと字躰
少〻遠回あるふれくれとも上世幽遠なれハ自然
〻乎ふ葉の轉訛せるもの
又常陸と下総の界ふ我孫子驛あり即姓氏録ふ
我孫伊と氣我孫公等の称見くりまと古名の存せ
もの
下野州足利学校ふ延宝江戸侯藤氏の収らゆ宋
板巾箱本の儀禮注疏一部ありとて此本もと久
慈郡増井村萬秀山昌宗寺の蔵本なりしよ

今ふ昌宗寺蔵書印ありと云
東鑑ふ石瀬与一太郎なるもの治承四年源頼朝佐
竹氏を攻佐竹氏金沙城ふ拒て戦ひ城邑ふ潰し忠義
死て敵し秀義遁れ去る頼朝報を遣して絹捕せ
しむ石瀬佐竹氏の滅とて悲しみ自行て獄ふ就く
頼朝怪んで故を問ふ石瀬涙泣して佐竹氏罪なく
讒人の為ふ陥り且又切ふ頼朝滅親の不利を説く頼
朝これを聴て義と其忠誠て善し綉て解て家
人とすと秀義遁ふ頼朝ふ帰とりア佐竹氏の

興廢存亡只此一个の与一太郎の忠節まれなる事乃
石浦氏ハ今の岩淑村ホ合邑せしなり
古昔長幡部福良女まさ大部子氏女ゝ乃貞節
を以て名あり又九子部婦人孝誼を以て賞せられ
近世皆川氏の家婢まさ子の貴命を固守し三孤を鞠
育して獄ホあること二十餘年終始一のめしとぐ
西山黄門源義公其忠節を憐みて祿を賜ふ
商家より嫁せしむと云まさ長山雷子あり此事年山
抄及び寄人傳に出て人口に称されること

其貞烈後世の龜鑑たるに足し只昭代治教の然
らしむるのみにして実ホ　國家の盛ホ此ハまた
まさに贊ヘ
雷子ハ水戸府城長山七平某の女にて奉行職帥岡
子左つ綱治の妻なり夫婦のわかひむつまじく婢
をつかひ内を治るの婦道うるはしき
ことにてくにためしなり
中ホ善助綱常ハ家婢の産ホ子ものく
みつくの子にして其婢をかくしそだてて淺村の某
小嫁せしめ綱常を愛育すること承生ホのごと

されば母子の間いとうも隔てなく綱常もまた孝行
なる心ばせもいとうもまさりて彼家婢のうめるとしなる十四五
歳まで志ありて侍らし其幼なき時病を憂うし
て宵子医薬と嘗試るあまり人目を忘れて祈
不動神崎寺の観音大士に素足まく家居し祈
り少数感応のこゝろにかなひてその病愈うし
是母の母代云母継母のいまゝめとなり侍るを不
家婢と云ひて綱常めて務其婢とし又ことを
おりふし敢尊く磯縄の如き女職とせしハ

ものゝ古人曰元婦人のうまれつき如を甚しくすを
一如なくは百拙捨一ことを嗚呼宵子や如為ん紀
ら世中の為女の教ものゝ侍らまし又綱常久し
召使ふる若侍花かけてなく寄るを心をうけてもまくいひ
なるを宵子もしらず時細沼他ふりしく留まるその間
ゝ志ありて入ることを称て母をやしなうをもて脇
指をもてしく切腹は唯呼ものゝ髪はらまて
死けり傍の衣裳うちかなぐりかなぐるものし
細沼ゆりたるを如志のくの趣始終を語るとぞ

女乃密まとるしかくれなるわ〳〵少て
其身の恥のうちに〳〵新てうまてのみを織て
うなるを出賣るの際さうりうを細治をてうこ
〳〵さ才家のうちれてわきをたるまひ八また
めーすれくとなるれとの婦徳をあり〳〵りろこ
の書ま貞女節女烈女まとりくしく志るーたるま八
いやまうてをかるを正徳三年の春すり病つ
まて四〳〵七月廿四日ふ才まる歳四十二ヒ戸駒之夫
柴寺とつふうはう暗りて妙殊院月淫日冷〳〵溢せり

まとに情〳〵をとるむて女貞烈の婦人なるすや長山
七平八久兵郡淺川村の産まて書と善せり余う富
祖父風也なるとの〳〵縁光くり又七平の孫ふ幼名助
七なるとのあり皆古幽軒ふ養れて婿とをり堅
と業と〳〵立碩と称せり水鏡庵と稱しまと兵川
家とをと云家久兵川の許ふ住がをり其をて立碩と
云父子何れも温淳篤實をとて郷曲ふ名あり立碩
のをと云察〳〵云淺ふ祖父の名を襲てまと立碩と
称せり相次て行誼あり其家参てかとをるとの弘

今茂本藩藤田幽谷先生請之撰墓碣之銘也

皆吉處士墓表

處士皆吉氏諱胤忠字子信稱立碩常陸久慈郡
大子邑人其先下総大姓相馬之族仕足利氏于古河後
遷于野之喜連川曾祖曰幽軒喜連川士人相馬玄蕃
之弟隱於醫後其母姓為皆吉氏從居大子其後喜
連川君餽之食糧以及其子云内大父而下皆不仕處
士為人温厚敦樸讀書通大義居家勤儉善誘子
弟教誨不倦拊循僮僕如而有恩平生展拜先人

墳墓以致思慕元旦中元必設雜菓雪霜雨未嘗有
廢也其孝敬如此夙受業於原南陽其於醫事多
所發明然不事大奔競優游里閭故世莫之知也文化
中增子淑茂宰北地嘉其行誼上請特加旌異許
其身佩腰刀及官府文書稱族鄉里頗榮之而
處士不以為華享年六十終于其家實文政二年
八月九日也葬于臥雲山先塋之側處士娶小宅氏
先沒繼娶町島氏前妻所生一男一女後妻生一女
男曰胤謙女壻一為黒崎貞孝一為飯村友吉貞孝

好学嘗與余游屢之書請余表其墓余素閑雲
士之行有足稱述書以遺之俾鏡諸石以示後人
同郡池田村鏡山まゝ下谷田村就屋ホの古墳にあり河内
土人の口碑而已すて證とすべき記載なゝ再考して
後篇に錄すべし

常陸記行　坤　大尾

書林

京都寺町通松原ル　菊屋七郎兵衛
大坂久太郎町心齋橋ヘ　河内屋喜兵衛
江戸芝神明前　和泉屋市兵衛
同　日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
同所四町目　須原屋佐助
同淺草茅町二町目　須原屋伊八
同芝神明前　岡田圣嘉
同本石町十軒店　英大助
同日本橋通二町目　小林新兵衛
同所　山城屋佐兵衛
同馬喰町二丁目　菊屋幸三郎　板